

神との再会

牧師 山本 護

燭火礼拝の翌日、少し片づけものをしていて、「あっ、あの本を読んでおかなければ」と鞆から取り出し、付箋をつけメモ取りながら礼拝堂で居眠りしてしまいました。

『第五の山／P.コエーリョ(1947～)』というブラジル現代作家の著作。甲府刑務所の受刑者Kさんに「今とても心動かされ何度も読み返していて、ぜひセンサーの意見も聞きたい」と求められていたので、年明け早々に予定されている彼との個人教誨に備えたかった。Kさんは読書家の長期受刑者で、これまでに『ヨブ記』やV.フランクルの『夜と霧』などについて語り合ってきました。

『第五の山』は、初期預言者エリヤの物語(列王上 17 章～)を翻案したもので、節度ある柔軟な想像力、聖書本文にはない創作された数々の警句が印象的です。これらの何がKさんの心を打つのか、私としてはどう感じるかを問いながら読んでいました。『第五の山』のエリヤはまどろみの中で「父祖ヤコブと神的存在との格闘」を夢として見ます。

「[もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから]とその人は言ったが、ヤコブは答えた。[いいえ、祝福して下さるまでは離しません]。[お前の名は何というのか]とその人が尋ね、[ヤコブです]と答えると、その人は言った。[お前の名はもうヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ] (創世 32:27～29)」。

コエーリョが創作したエリヤは、ヤコブの大胆素朴なふるまいを夢で見、神と自分との関係を改めて発見します。「[あなたが私に重要な使命を託すためには、あなたが私を祝福するまで、あなたに対して戦い続けなければならないのです]。エリヤが神に対する挑戦だと思っていたものは、実は、神との再会だった」。

バサッと本を落として居眠りから覚めた。ほんのわずかな時間だったでしょうが、濃縮された夢でした。「神と格闘するヤコブを夢で見たエリヤ」、それを夢で見ていた私。三つの次元がロシアの民芸品マトリョーシカのごとく入れ子になっています。

コエーリョが描いた預言者エリヤの試みは、聖書と格闘するキリスト者がやっているような神への問い。そして何とかそれを見つけようともがく私たちの姿勢です。「エリヤが神に対する挑戦だと思っていたものは、実は、神との再会だった」。

夢から覚めると、十字架のむこうには高根の「まんどり山」。荒涼としたフェニキアの第五の山ではありませんでした。これがKさんへの私の答えになりそうです。Ω

